

『資本論』の魅力…「新版『資本論』の研究」の完結に当たっての特別講演

2025年4月12日 ykbdata

はじめに

35年以上前に『資本論』に初めて接し、2002年4月に新書版『資本論』で始まった私の『資本論』研究は、22年10か月後の今年2025年2月に一応の完結を見ました。完結に当たり、私なりに『資本論』の魅力を、読んだことがない人にも伝わるように、いくつかの面白い具体例で紹介します。それで、少しでも『資本論』を読んでみようかなという人が増えればと願ってお話します。

1、「カンボジア黙示録」…貨幣の神秘があらわに

第一部で私がビックリしたのは「貨幣論」です。マルクスは、貨幣はそれ自身が商品であり、どんな商品とも交換可能な「一般的等価物」であることを、貨幣からその神秘性引きはがして、その本性を暴き出します。最終的には小さな量で大きな価値を表し、しかも鑄造可能な貴金属が貨幣となりますが、歴史的にはいろいろなものが貨幣になりました。

私が、な〜るほど、と納得したのは、マルクスの話ではありません。[こちら](#)を見てください…。どうでしょうか。『資本論』がいかに歴史の真実に立脚しているかを感じました。

2、「ロード・オブ・ザ・リング」…戦国ブリテンは日本とそっくり

「しんぶん赤旗」2024年5月26日の「読書」欄で紹介された『戦国ブリテン アングロサクソン七王国の王たち』（桜井俊彰、集英社新書）は、イギリスの封建制が完成する前の、まさに日本の戦国時代に酷似した群雄割拠の状態で、「指輪物語」（ロード・オブ・ザ・リング）の映画の世界の、史実的裏付けが読めると思って読みました。

マルクスの歴史観である史的唯物論とはまったく真逆の、英雄たちの叙事詩でしたが、その内容が日本の戦国時代と酷似していました。日本の戦国のたたかひの勝者は、敗者の家系を根絶やしにする皆殺しか、後の反逆を抑えるために人質をとりました。イギリスの戦国時代もまったく同じで、打算にもとづく離合集散もありました。私の「新版『資本論』の研究」でも、[このことについて簡単に触れています](#)。



装丁と目次の扉の兜レプリカ

何世紀も離れ、地球のほぼ反対側のイギリスと日本の歴史がほぼ同じです。人類の歴史は、大まかに言って原始共産制、奴隷制（古代王権）、封建制、資本主義と進み、やがて社会主義・共産主義に移行せざるを得ないという、[史的唯物論の歴史観](#)の正しさを改めて実感しました。

ここで[「封建制」という言葉についての由来](#)も調べましたので紹介しておきましょう。

3、ルターと「ベルサイユのばら」…フランス大革命を準備した宗教改革

ベストセラーとなった池田理代子の「[ベルサイユのばら](#)」はベルサイユ宮殿内の華やかな愛憎劇です。平民アンドレの貴族オスカルへの悲恋物語でもあります。結末はフランス大革命によるオスカルの戦死とマリーアントワネットの処刑で終わります。オスカルとアンドレは架空の人物です。

なぜ当時のブルジョアジーは王侯貴族をそんなに憎んだのか、私にはよく分りませんでした。これにも「資本論」は回答を与えています。もしみなさんのなかにプロテスタントの信者がいたら申し訳ないが、マルクスの目から見ると、こういった側面もあったということでご了解いただきたい。日本共産党は信教の自由を未来永劫に守ります。…[「節欲」は神の教え\(プロテスタント\)](#)

《追加》労働者は半日ただ働き？・・・資本主義の「搾取の秘密」

エピソードばかりで「資本論」の理論がない！では私たちの給料はどうやって決まるのでしょうか。マルクスは、資本家全体が労働者（給料をもらって働く人）全体に約束した給料をちゃんと払っていても、資本家の富はどんどん大きくなっていく現実を見て、「剰余価値」の搾取を発見しました。

必要労働時間と剰余労働時間	
8時間労働に換算すると（大阪経済大学泉弘志教授の2000年の推計）	
必要労働時間	剰余労働時間
3時間42分	4時間18分

労働者は例えば一日の労働のうち半日で自分の生活費に相当する価値を生みだし（必要労働時間）、あと半日は資本家の儲けのためにただ働きをしていること（剰余労働時間）、つまり給料は労働の価値ではなく労働力の価値（家族を含めた生活費）なのです。

右の図は志位議長が[学生オンラインゼミ](#)で示した現代日本の必要労働時間と剰余労働時間の推計です。

4、「薄利多売」は小商人の主義？・・・驚きのマルクス経済学

私が『資本論』を読んで一番驚いたのは、第三部の商人資本の篇で、「薄利多売」が経済学的に解明されていたことです。ここは少し数字も出て来て難しいですが、見てみましょう。

「薄利多売」の理論的根拠

5、自分で自分に利子を支払う？・・・今に生きるマルクス

資本主義の発展で、利子生み資本が（昔は高利貸し、いま銀行）が生産過程（事業所）で産業資本に、流通過程（市場）で商業資本家に、資本を貸し付けて利子をとるようになると、産業資本家と商業資本家はその利潤から利子を支払うようになり、利潤は企業者利得（産業資本家あるいは商業資本家の取り分）と利子（銀行など利子生み資本の取り分）に分裂します。

ここで面白いのは、自己資本だけで営業する産業資本や商業資本は、帳簿上の処理として、すなわち資本家の観念として、企業者利得に加えて市場の利子率による利子分も上乗せして高い利潤率を確保します。つまり、自分で自分に利子を支払うのです。その帳簿処理が現在でも資本の内部の见えないところで行われていたというのが[私の経験](#)です。

最後に

どうだったでしょうか。マルクスは、マルクス以前の経済学をひっくり返すのが大好きで、そのたびに驚かされます。マルクスは、エンゲルスが「社会主義を科学にした二大発見」と言った、「剰余価値」と「史的唯物論」を駆使して、それまでの経済学を根本的に変革しました。そのマルクスの主書『資本論』を読んで見ませんか。（ここでおまけに【付録】と案内チラシの[イメージ図](#)を説明します）

私の[Webサイト](#)が、少しでもその助けになれば幸いです。分からないことがあれば、気軽に私にメールして質問してください。いっしょに考えましょう。以上で「『資本論』の魅力」・・・「新版『資本論』オンラインゼミ」特別講演を終わります。ご清聴、ありがとうございました。m(_)_m

【付録】

